

GOD EATER ~The
Phantom Edge~

キツねえ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

GE2RBの本編終了後（ジユリウス・ロミオ復活済み）から約半年ほど経った頃からスタート。

かつてマグノリアIIコンパスで行われた未許可の偏食因子投与実験。その中で人知れず生き残った主人公『断神ツルギ』は人型のアラガミとなった。彼は野に放置された神機を使い、荒廃した世界を生き抜く。

く亡霊の刃、神を断つく

※駄文、中二設定、鈍足更新、オリ主などにアレルギー反応を起こす方はブラウザバツク推奨。

目次

0 / 赤き刃	1
1 / 鏡映しの炎剣	4
2 / 亡霊の可能性	7

0 / 赤き刃

白い雪が積もる朽ちた寺。月光が雪に反射し辺りを照らすその場所で、一匹の獣と一人の人間が対峙していた。

マントの様な金色の鬘をなびかせ人間を睨みつける獅子の様な獣。

その体以上の大きさもある赤い剣を片手で持ち、獣に冷たい視線を浴びせる人間。吹き荒ぶ風の音のみが支配する廃寺で、両者は互いの武器を構える。

刹那——雪が爆ぜ、固い物体がぶつかり合う音が廃寺に響く。

獣は爪で、人間は剣で、互いの本能に身を任せながらぶつかり合う。

実力は拮抗していた。獣が雷を放てば人間は剣についた盾で防ぎ、人間が剣を振えば獣は身を翻し軽々と避ける。

剣が空気を切り裂きながら獣に迫る。赤い半透明の刃はまるで水晶の様に儂げで……。それでいて、あらゆる者を切り裂く危なさを持っていた。

獣はその斬撃を後ろに跳んで躲す。その身体の大きさに合わせ軽々しき。5mは越えるであろう体躯の獣は常識では考えられない速さで人間を翻弄する。

拮抗した状況を破ったのは、人間の持つ『剣』が『銃』へと変わる音。重低音を響かせ、長い刀身が巨大な銃へと変貌する。

人間はその巨大な銃を獣へと向けると、迷いなく引き金を引いた。

重い音と共に吐き出される、地獄の業火を圧縮した様な砲弾。獣へと一直線を飛んでいき、接触したと同時に爆ぜた。

爆音が廃寺を支配し、爆炎が獣に毛と肉、雪を解かす。

凄まじい衝撃で揺れる視界の中で、獣は爆炎を切り裂き赤い刃を振り被る人間の姿を見た。

半透明の赤い刃が弧を描き、燃え盛る獣の首元へと吸い込まれていく。

噴き出す血は炎のように熱く、刀身とその使い手を熱する。

獣はその一撃を受け、口から血を吐き出す。明らかに致命傷だ。たとえその人間がそのまま何もせずにとつたとしても、逃げ切れたとしても、死ぬことは間違いないだろう。けれども獣は最後まで自身を殺すであろう者に敵意と敬意の眼差しを向け続けた。自身を殺す人間に、その強さに、獣の王として誇りを見せつける。

人間が何かを言うと、赤い刃が振り上げられ、再び弧を描き振り下ろされる。

先ほどよりも深く、深く肉を切り裂く刃。自身を焦がす熱、そこから発せられる熱と痛みに獣は吠え……やがて息が途絶えた。

赤き刃を振り、血糊を飛ばす。そいつは、獣の血よりも赤い、黒い外套に包まれて
いる。

人間の持つ剣が怪物の口へと変貌し、獣の死体を食い荒らす。

吹き荒れる風で外套が揺れる。

その左腕につけられた『赤い筋の奔った腕輪』が妖しく光った。

「……食い足りない」

そう呟くと、人間はどこかへと去っていった。

1 / 鏡映しの炎剣

「さて・・・早速だけど、始めようか。今回、君達を呼び出したのはとあるアラガミについての話なんだ」

「俺達と呼ばれたという事は、感応種か？」

いつも通り、胡散臭い笑顔と飄々とした態度のサカキにヒロは話しかける。

——フェンリル極東支部、支部長室。そこに新生ブラッド隊の全員が集められている。

「ある意味ではそう呼べるだろう。・・・君達はフアントムというアラガミを知っているかな？」

「フアントム・・・いや、知らないな」

各々が思考を巡らせる中、ロミオが話し出す。

「あ、俺知ってるよー。確か、六か月前・・・螺旋の塔が壊れて、聖域になった頃から出した噂だよ。反応はあるのに姿が見えないとか、危険な大型アラガミや感応種を無差別に食つてるとか、神機使いを襲わないとか・・・」

「そう。そのフアントムだよ・・・説明を始める前に、この映像を見てくれ」

数秒のノイズの後、映像は開始される。

『こちら先発隊。『ファントム』と思われる偏食場パルスを放つアラガミの元に来たのだが・・・発見できない』

『偏食場パルスは感知されています。必ず付近にいるはずですよ。よく探してください』
フエンリルの神機使いとオペレーターの話が流れる中、映像は鉄塔の森を映し出し
ていた。

暫くは何も映らず、10分くらい経った時。

『・・・ツ!? 感応種と思われる大型アラガミが当作戦区域に侵入! なにこれ、速すぎる!
到着まで10秒ありません! 即時撤退を!!』

オペレーターの声。だが、その指令に神機使いは応えられなかった。

画面を見れば分かる。目の前に、黒いイエン・ツイーが映っていた。

『・・・無理だ。感応種と接触した。神機の停止も確認・・・ダメだな、悪い。飯の約束
は守れねえわ』

『諦めないでください! 至急、応援部隊を・・・!? 何、この反応・・・後ろに何か・・・
これは・・・『ファントム』!? 後ろから砲撃きます!!』

画面が大きく揺れると同時に、黒いイエン・ツイーが画面から消えた。赤く輝く炎の
砲弾がイエン・ツイーを射抜き、爆発し、吹き飛ばしたのだ。

その後、黒い何か爆炎を切り裂き、その向こうへと渡った。

『くそ、炎が酷くて向こう側が見えない……!』

神機使いが立ち往生している間に、炎は徐々に小さくなっていく。

やがて向こう側も見えるようになり……

『あ、あれが『ファントム』……?』

炎に照らされ輝く赤い刃が、イエン・ツイーを引き裂き、喰らい尽した。

その刃は、その怪物の口は、どう見ても自分達の使う武器と酷似していて……

『……神機使い、なのか……?』

その左腕にはめられた腕輪が、応える様に赤く輝いた。

2 / 亡霊の可能性

『・・・神機使い、なのか・・・？』

フアントムがその神機を銃形態へと変え、撮影をしていた神機使いに向けると引き金を引く。

炎の弾丸が神機使いの足元に着弾すると、そこから爆炎が生まれ映像は一面の炎に包まれた。

「炎が消えた頃にはフアントムは消えていたよ。幸い、この炎が殺傷能力の無い『裝飾弾丸』や『裝飾爆発』の様な見掛け倒しだったから、この神機使いは無事だ」

黒いイエン・ツイーには映像でも分かる程の超威力の弾を撃って捕食し、人間・・・神機使いには威力の無い煙幕の様な弾を撃ちその間に逃げる。

神機使いとアラガミの区別。アラガミには敵対し、神機使いからは逃げる・・・いや、その前の様子を見ると助けるまでしていた。

更にはあの腕輪と神機。どう考えても『アラガミ』とは思えない。
「・・・なあ、サカキ博士。こいつは本当に『アラガミ』なのか？」

ヒロガブラッドの皆の気持ちを代弁する様にそう言う。

「最初の弾……『メテオ』級の威力だった……アラガミが、そんなのを使うのかよ」
『メテオ』……発射後、空中に長時間待機させオラクルを充填し、威力を上げる特殊な弾丸だ。

「……『アラガミ』だよ。けれど、知能を持ち、人間を助ける、人に優しいアラガミだ」
サカキは思いふける様に天井を見つめ、ポツポツと語りだす。

「疑問に思うだろう。なぜ、そう確証しているのかとね。簡単だ。前例があるからさ」

それは、昔自分たちを助けてくれた存在。白い子供の様なアラガミ。

「昔……いたんだよ。僕たちを救ってくれた人型のアラガミが。シオと言ってね、彼女は私たちを助ける為に月に昇ってしまった……特異点だっただよ、彼女は。」

……ファントムは、『聖地』に続く、長いアラガミとの争いを止める鍵になるかもしれない。君達に頼みたいのは、ファントムと良好な関係を築いて貰う事だ……詳しくは、第一部隊やクレイドルの皆が戻ってからしよう」

そう、サカキは締めくくる。

再び現れた『人型のアラガミ』。

アラガミとの長い争いを止める終止符に……そして、月に昇ったシオとの繋がりを得る鍵に成り得る彼は、絶対に確保しなければならぬ。

(ヨハネス……二度目のチャンスは、絶対にはしないよ)

† † †

『．．．？』

一面緑の草原で、彼女は目を覚ます。まるで、何かに呼ばれる様に。

『．．．．．！！』

そうして、遙か先に見える『青い球体』に向かって叫ぶのだ。

祈るように、願うように。

再び、『彼』に会えるかもしれない。その機会が来た事を彼女は喜ぶ。

緑の月で彼女は叫ぶ。愛しい彼に届くように。

そのメッセンジャーが、早く彼の元に行くように。